

のだろうか」という不安は感じないで済みます。

しかも職種は単純な接客業だけでなく、自身の知識や経験を活かした業務を選ぶこともできます。客に頭を下げるのではなく、客から「先生」と呼ばれるような職種も多いでしょう。自分の知識や経験を活かし、自律的に選んだ道で活躍できるような独立が可能になっているのです。

もちろん独立を果たすのに、必ずインターネットを利用しなければならぬわけではありません。自分のキャリアを主体的にデザインする姿勢の持ち主であれば、業種や業態は問わず、独立して成功を収められる可能性が高いのです。

そこでこの第4章では、そのような独立を果たした人たちの实例を見ていくことにします。

2 四十代でウェブサイト制作を学び、その請け負 い業で独立——柴田健太郎さん

ある程度の年齢になると、普通は管理職への昇進が身近な話題になってきます。しかし「昇進なんかしなくていいから、いつまでも現場の第一線で働いていたい」と望む人も多い

でしょう。とりわけ技術者に、その傾向が強いようです。

大手電機メーカーのグループ会社で、通信機器の回路やシステムを設計していた柴田健太郎さんも、そうでした。三十代の後半に管理職へ昇進してからは、好きな設計の仕事ができなくて不満だったのです。どうしても部下や予算の管理など、慣れない仕事にストレスがたまる日々を過ごすようになりました。

「家にいる時も『顔つきが暗くなった』と妻から言われていたんですよ」

そう柴田さんは、当時を振り返ります。

二十一世紀に入り、四十代の半ばにさしかかった柴田さんは、課長として十五人の部下を抱える立場になりました。十五人もの部下の中には、柴田さんにとって必ずしも詳しくない分野を専門にしている人も含まれています。彼らを管理すると言っても、細かい具体的な技術面での相談などには応じることができません。それも柴田さんにとっては、とても残念なことに感じられていたそうです。そのため彼は、中途退職することを真剣に考えるようになりました。

もちろん定年までは我慢して、定年後に自分の好きなことをやるという選択肢もあるのでしよう。しかし柴田さんには「定年後、新たに何かを始めるのでは大変そうだ」という思い

もありました。新しいことを始めるのなら、なるべく若い方がいいのではないかと。そう考
えて柴田さんは、会社が打ち出した早期退職優遇制度を利用する決意を固めたのです。

彼には当時、中学生と小学生の娘もいました。

「でも妻に早期退職制度の話をするに『それを利用して、辞めちゃえば』と言ってくれまし
た。『いろいろなアイデアを思いつく力がある人だから、会社を辞めても大丈夫。どうにか
生活していけるだろう』と思ったのだそうです」

柴田さんが退職したのは平成十四年（二〇〇二年）の三月、四十五歳の時でした。

「次に何の仕事をするかは未定でしたが、二度と宮仕えはするまいと心に誓っていました。
自分で独立して仕事をするなら、これからはインターネット抜きには考えられません。何の
仕事であれ自分のウェブサイトを持って、そこで宣伝や受注の受付をすることになるでし
ょう。そこで、まずはウェブサイトのつくり方を覚えようと考えたのです」

そう語る柴田さんは退職後の六月から七月にかけての五週間、ウェブサイトの制作を教え
るスクールに通いました。その時、ウェブサイトづくりという作業が自分の性に合っている
と感じた彼は「仕事のために自分のウェブサイトをつくるだけでなく、ウェブサイトの制作
自体を仕事にしまおう」と考えるようになったそうです。

柴田さんは若い頃、美術系の大学へ進むうかと考えた時期もありました。そのため、おそ
らくウェブサイトの制作に役立つようなデザインの素質も持っていたのでしょう。

かくして柴田さんは、退職から一年後の平成十五年（二〇〇三年）三月に、ウェブサイ
トの制作などを請け負う個人事務所「工房Shibake」を設立しました。開業のための
資金はスクールの受講料など、全部で七十万円ほどで済んだそうです。

設立前の準備期間を含めて、平成十六年（二〇〇四年）の九月までには、十九件のウェブ
サイト制作に携わりました。その中でも大きなステップになったのは、東京都大田区の工業
技術集団のウェブサイトを制作だったそうです。この集団に加盟している三十一の会社を自分
で取材して回ったことがきっかけで、そのうちの数社から、それらの会社自体のウェブサイ
ト制作も依頼されたのです。柴田さんが最初に制作した工業技術集団のウェブサイトの出来
ばえが評価されたからこそ、そういう追加の受注へと話が発展したのでしょう。

独立を果たした平成十五年（二〇〇三年）の年商は九十万円ほどで、会社員時代の年収と
比べれば微々たるものしかありません。しかし開業資金の七十万円は、すでに回収したこ
とになります。事業を始めた一年目としては、むしろ上出来だと言えるのではないでしょ
うか。

ウェブサイトの制作を請け負っている業者は、世間に決して少なくありません。しかし柴田さんは、他の業者にはない「強み」を武器にしています。

「この仕事は、ただウェブサイトをつくる能力だけあればいいわけではありません。効果的なページづくりのためには、それぞれの企業などの仕事の内容を深く理解する必要があります。そのためには社会での経験が大切です。お客様との打ち合わせには、会社に勤めていた頃に培ったプレゼンテーションの能力なども役立ちました。ウェブサイトのデザイナーには若い人が多いのですが、彼らにはできないことが自分にはできると自負しています」

これまで柴田さんにウェブサイトの制作を依頼してきた相手は、その多くが中小企業でした。中小企業の場合は経営者が自ら、ウェブサイト制作のための打ち合わせに顔を出す場合が多いようです。

「打ち合わせ時に経営のノウハウや、さまざまな業界の実状に関して、いろいろと勉強になる話を聞くことができます。個人事業者として私が仕事を進め、今後の展開を考えていく上で、それらの情報が大いに役立っているんですよ」

「将来的にはウェブсайт制作だけでなく、さまざまな分野に手を広げていきたいと思っています。そのためにも今、これまで知らなかったいろいろな業種の世界を知ることができると、とても参考になります」

そんなふうに柴田さんは、今後の事業の拡張にも積極的な姿勢を示しています。

「やりたいことをやっているのでストレスがなくなり『明らかに表情が明るくなった』と、妻にも言われているんですよ」と彼は、独立が自身の精神面に与えた効果を語ってくれました。

3 五十代で商社の営業を退職し、ネットショップを開店——アイコインズ、石塚真一郎さん

「週末起業」や独立を希望している人たちにとって、インターネットが大きな味方になってくれることを、これまで説明してきました。

しかし「自分はコンピュータが苦手だから」と思いながら読んでいた人も多いでしょう。そういう人たちも柴田さんの事例には、大いに勇気づけられたのではないのでしょうか。

柴田さんは四十代の半ばでウェブサイトのつくり方を習い、翌年にはそれを仕事にして、お金を稼げるようになったのです。

インターネットの利用は、決して難しくありません。食わず嫌いをしている人も、思い